



[令和 4 年 9 月 14 日 定例会発表要旨]

わが波乱万丈の人生を振り返って…消えぬ謝辞

手稲郷土史研究会 会員 平木 重男

私は大正 15 年 6 月生まれで今年 96 歳を迎えたが、振り返ると、波乱万丈で心痛む生涯でもあった。幼少期は競馬騎手に憧れ、父親にねだって十勝より若駒を買い入れるが、練習中に骨折させて夢を断念。学校卒業後は国鉄幌内太駅（のちの三笠駅）に就職。操車係を目指して勉学に励んでいた頃、長兄より満蒙開拓の誘いがあり、家族に同行することを決断。国鉄マンとして生きようという夢も潰えた。



昭和 19 年 4 月、東安省鶏寧県の哈達河開拓団へと入植する。満州国の東端に位置するところで、この開拓団はのちに「麻山事件」で知られるようになる。昭和 20 年 8 月 9 日、日ソ開戦を知った開拓民が逃避行の途中、麻山でソ連軍に包囲され、12 日、400 有余名が集団自決、私の父もその一人だった。また、姉も東安県で自決していたことを後年、書物の中で知らされる。

一方、私は 20 年 4 月召集、牡丹江興隆歩兵として入隊後、指揮班に入る。7 月初旬、液河での現地人の暴動で脱走兵が出た際、満語が話せた私が満州服と拳銃を渡されて真夜中の市街を探索し、一軒家に潜んでいた兵を帰隊させたことが記憶に残る。同月中旬、移動命令で牡丹江から汽車に乗り新京經由で安東省の鳳城へ。葉煙草会社の倉庫にゴザを敷き仮兵舎とする。その後、下士合格の内辞を受け四台子で軍用品の警備に就く。燃料用アルコールの盗難事件では満州人の協力を得て犯人逮捕。村民が恐れていた窃盗団と判り、これがきっかけで交流が深まる。8 月 11 日、鳳城中隊へ復帰。翌 12 日、警備中に知人の王侯から「日本負けた、ソ連侵攻中、逃げるがよい」と教えられ報告に戻るが、既に知っていたのか、隊は騒がしかった。重要書類を焼却し、夜半に鳳城駅へ集合せよという。

私は脱走を決意した。鳳城駅出発寸前、斎藤二等兵と共に壕を掘った山へと走る。信頼する王侯家を訪ねると、驚きながらも着替えのための満州服を出してくれた。軍服など所持品は奥山で焼却するが、無念の涙が止まらなかった。王侯家で農作業を手伝うも密告され、迷惑はかけられぬと覚悟を決めて二人で難民収容所（日本人小学校）へ行くと、その責任者は、なんと葉煙草会社の社長だった。800 名は収容されていたろうか。食糧確保のため近隣の開拓団に入るが、治安は悪化するばかりで壘行が絶えず、かつての戦友の遺体も野花を供えて葬った。やがて開拓団は解散、私は理髪店に、斎藤は病院に雑役夫として落ち着く。12 月初旬、私は強制労働に就くため田師付へ。乏しい食糧のなか負傷兵の看護などに従事するが、激しい内戦（八路軍×国府軍）で正気を失う者も多く見た。

昭和 21 年 6 月、中国が日本人避難民を帰国させようと奉天に集めているとの情報を得、7 月初旬、死を覚悟しての逃避行が婦女子を交えて決行された。途中、乳飲み子が背中で亡くなったり衰弱した子どもを置き去りにしたり暴民に金品を渡して命乞いをしたり、惨絶な体験を経て、40 日余で奉天難民収容所に辿り着く。九州長崎の佐世保港に降り立ったのは、9 月中旬だった。

軍人帰国手続き後、手当 300 円をもらい、食事代と土産のリンゴ代の残金 10 円を手に、北海道砂川の姉宅へと復員。その後は三井砂川炭鉱、手稲では日本除雪機製作所に勤務した。

戦争のむごさは筆舌に尽くしがたい。平和を切に願いつつ…。



鳳城で共に部隊を脱走した斎藤氏と豊平川の花火大会で劇的な再会をする
〔昭和 42 年 8 月 5 日「北海タイムス」掲載〕

● REPORT

視察研修ツアー「発寒・琴似・五天山・篠路駅界隈探訪」

台風一過の9月20日、手稲郷土史研究会の研修ツアーが二年ぶりに催されました。会員はじめ29名が参加し、発寒、琴似から福井の五天山公園へ、さらに篠路駅界隈を巡るコースを楽しみました。

① **新川「天狗橋」** 橋の欄干と街灯に“天狗”のモチーフがかたどられています。講師の国田洋治氏（発寒歴史散歩倶楽部 代表）によると、当時の工事請負の棟梁の体格が大きく鼻が天狗のようであったことが、橋の名の由来であるとか。ユニークで、いきなり親近感が持てました。明治期の新川は、「軽川大排水」とも呼ばれていたそうで、湿地の開削は難工事であったといいます。普段、車で通り過ぎて行く景色も歴史の上にあることをしみじみと感じました。

② **発寒神社のミステリー** 昭和7年に北大の研究者が発見したという縄文末期の環状列石（レプリカ）が境内に…。古代のおそらくは祭祀の場所が、時空を超えて神社として存在することにミステリーを感じませんか？ パワースポット？ 思わず、そんな妄想を抱いてしまいます。ちなみに神社が接する通りは「稻荷街道」でした。

③ **琴似屯田兵の歴史** 屯田兵の入植地で資料室を見学。原始林を開墾した草創期の魂 漲る風景が甦るようで圧巻でした。掲げる旗は星の印でサッポロビールと同じです。この紐付けを探るのも楽しい。地下鉄 琴似駅近くに復元された屯田兵屋は、木造平屋建て。間取りは一見立派ですが、とても寒冷地向けとは思えず、本州から来たばかりの屯田兵にとって冬の厳しさは耐え難いものだったでしょう。

④ **五天山公園** 地質にお詳しい柏原信氏を講師に、急流 琴似発寒川によって形成された扇状地の上に 福井・平和・西野・西町・発寒地区が開かれたこと、西野周辺の水田耕作の歴史などについて学びました。五天山には名残の水車小屋があります。かつて“西野米”を育てた農家は約150戸。一定勾配の扇状地で豊富な水を利用し、一軒毎に水車が設置されていたそうです。この日は実際に（特別！）水車を回していただきました。水の動きが歯車や支柱に伝わり、杵がゴットン、ゴットンと臼を打ち付ける——自然の力を動力に転換する先人の知恵には感服です。“西野米”に想いを馳せつつ、用意されたお弁当を味わいました。

⑤ **篠路駅界隈** 「篠路歌舞伎」は土着的文化とは異質な匂いが感じられ 興味を持っていたところですが、なんと手稲郷土史研究会 会員の大沼靖男氏（篠路歌舞伎保存会 会員）の祖父 三四郎氏が山形県から入植し、過酷な労働の中で酒や博打に身を崩す若者を救うために 農村歌舞伎として定着させたとのこと。花道や回り舞台のある芝居小屋まで作り、花岡義信という芸名で人気を博したとお聞きし驚きました。一時、衰退しますが、有志が「篠路子ども歌舞伎」として復活させて、文化を継承しているそうです。こののち、会員の杉浦正人氏（札幌建築鑑賞会 代表）の案内で 五差路、篠路神社、龍雲寺、丸ヶ街道などを巡りました。とくに興味深かったのは駅周辺の倉庫群。ひととき立派な札幌軟石の「高見倉庫」では、タマネギなどの野菜出荷拠点から 貸倉庫業へと至る 地域の産業史にも触れました。篠路駅の高架化に伴い 将来はこの界隈も変貌するのでしょうか。

帰路、心地よい疲れとともに 正面に手稲山が見えて来ました。皆さん、お疲れ様でした。 諸橋弘子（手稲郷土史研究会 会員）



発寒神社の「史蹟 環状石垣之跡」



復元された琴似屯田兵屋



五天山公園で土地の成り立ちを学ぶ



地域の産業史を物語る篠路高見倉庫



龍雲寺…手稲にゆかりある早山清太郎の墓前にて

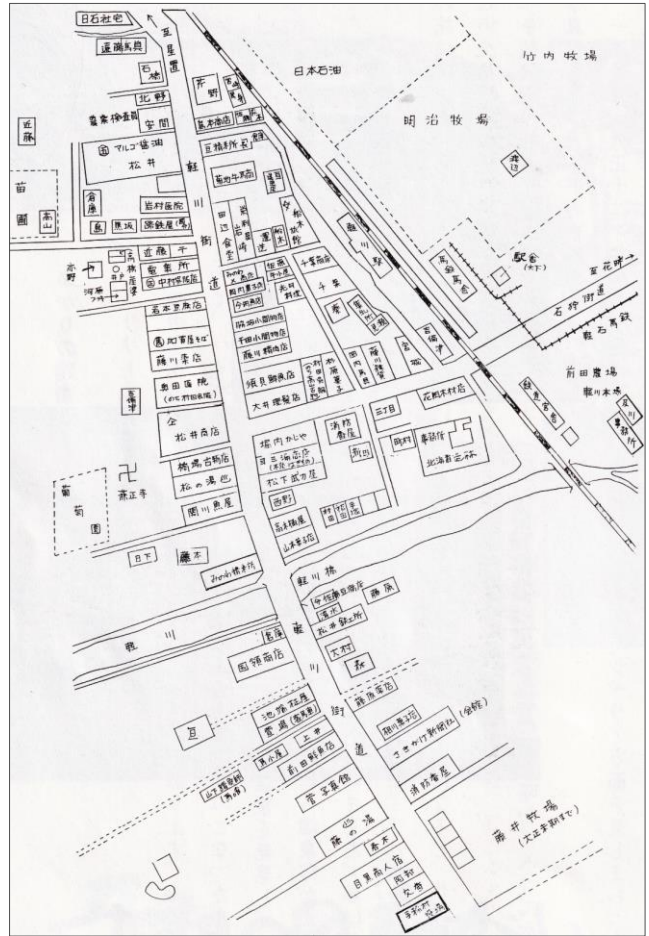
「手稲本町」の歴史秘話（1）

▶ 札樽間のかなめ 軽川…

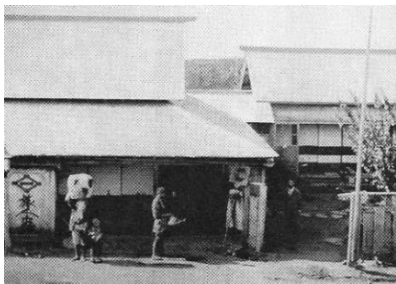
現在の手稲本町周辺は昭和17（1942）年の字名改正まで「軽川」（のちに字手稲）と呼ばれ、手稲村の時代から役場が置かれるなど常に手稲の中心地でした。いづごろ開けたかは定かではありませんが、明治5（1872）年に隣接の稲穂地区へ入植した人の話として「すでに軽川には5、6件の家があった」という記述が残っています。また明治10年代には、軽川に事務所を構えた結社「開進社」による土族移民も記録されています。

明治12（1879）年、小樽と札幌を結ぶ道路が開かれました。明治13（1880）年の「官営幌内鉄道」の開通に伴って翌年には停車場が設けられ、軽川は交通の要衝、物資の中継地としての役割を果たすようになります。街道筋 ※現在の二十四軒手稲通周辺には旅館・商店・食堂・浴場・薬店・理髪店などが並び、商店街も形成されました。

なお、軽川の地名は河川に由来しますが、その意味は明治期に永田方正が著した『北海道蝦夷語地名解』の「春日水アリテ 夏日水無シ 故二 涸川ト呼ブ ガルガワハ カレカワノ訛ナリ」という説が有力です。



昭和初期の軽川街道のようす
 （手稲中央小学校『郷土誌 がる川』より）



明治30年代撮影「船木旅館」
 （札幌市手稲区『手稲で見つけた手稲のはなし』より）



明治40年頃撮影「葦輪商店」
 （葦輪家 所蔵）

まれましたが、平成11（1999）年に解体。平成14（2002）年3月、現在の駅舎が竣工し、5月には札幌市の街路整備事業による自由通路「あいくる」も完成しました。

▶ 山小屋風の旧駅舎…

昭和9（1934）年2月、「軽川駅」（のちに「手稲駅」と改称）の新駅舎 ※2代目とされるが初代駅舎については不詳が落成しました。これは、手稲山にあった北海道大学の山小屋「パラダイスヒュッテ」を模した丸太づくりの建物で、“山とスキーのまち”を象徴するものでした。

軽川駅の歴史は、明治14（1881）年に始まります。当初は簡易停車場（フラッグステーション）としての開業でした。手宮～札幌間を一日三往復する汽車のうち、軽川に停車するのは1便だけでしたが、やがて、小樽・札幌・石狩を結ぶ重要な機能を担うようになっていきます。

昭和57（1982）年、利用者の増加により駅北口（前田側）へもつながる橋上式の駅舎が完成し、山小屋風のこの駅舎は閉じられました。旧駅舎はその後、喫茶店として再利用されて親しまれました。



昭和9年撮影 軽川駅 駅舎落成
 （札幌市手稲記念館 所蔵）

▶ 植林によって守られた手稲山…

まちづくりが進む 開拓草創期の札幌では、建築材や燃料として多くの樹木が手稲山から運ばれていました。しかし、過度な伐採と相次ぐ山火事で山は次第に荒廃し、洪水や崖崩れをまねくなど深刻な状況に陥っていきました。

このことを憂いた 植物学者で元 道庁技師の田中^{たなかさかい}穰や 元 道庁林務課勤務の近藤^{こんどうしんたろう}新太郎らによって、明治31（1898）年に設立されたのが『北海道造林合資会社』です。事務所は軽川^{ほっかいどうせうりんごうしがいしゃ}駅の南側にありました。「北海道は森林が広大で樹木は無尽蔵と言われるが、誤りもはなはだしい。ようやく知識人がこのことに気づいたが、開拓民が増えるほど樹木はさらに必要となる。このまま森林を放っておけば、人々は大変苦しむことになる…」と森林資源保護の必要性を訴え、手稲山の植林に取り組みます。軽川 ※現在の手稲本町2条4丁目付近 をはじめとする苗圃で育てられた カラマツ、トドマツ、シラカバ、オニグルミ、ドイツウヒなどが“苗木枯死”“整地困難”“兔鼠害”を克服しつつ根付いていき、大正期には成果があらわれるようになります。その後も造林は続けられ、昭和12（1937）年頃から、同社の所有林は、『王子造林株式会社』 ※現在の王子木材緑化株式会社 などへと移譲されました。

校歌に謳われ、行楽で親しまれ、まさに手稲区のシンボルである 手稲山の“豊かな緑”には、先人たちの知恵と労苦があったことを忘れてはならないでしょう。 [編責：広報部]

* 手稲区役所1階「ていねく情報・文化発信コーナー／ていぬの部屋」に掲示予定のパネル原稿より一部抜粋しました。参考文献：「手稲村史原稿」（仙堂控え）、札幌市『手稲町誌』、札幌市立手稲中央小学校『郷土誌 がる川』、札幌市立前田小学校『郷土誌 まえだ』、手稲連合町内会連絡協議会・手稲鉄北連合町内会連絡協議会『手稲開基 110年誌 手稲の今昔』、札幌市教育委員会『さっぽろ文庫 58～札幌の通り』、同『さっぽろ文庫 78～老舗と界限』、同『新札幌市史機関誌 札幌の歴史』第13号・第25号・第26号、沖田紘昭『手稲に咲いた明治の大輪 北海道造林合資会社物語』、札幌市手稲区『手稲でみつけた手稲のはなし』、同『手稲区歴史ガイドマップ』、手稲郷土史研究会『史料に見る手稲今昔～手稲歴史年表』、ほか。



★ **パネル展が開催されます** 『手稲開村150年記念～見る 聞く 学ぶ 手稲の歴史』事業の一環として10月28日（金）から11月6日（日）まで、JR手稲駅自由通路「あいくる」において、手稲郷土史研究会主催・手稲区後援によるパネル展が開催されます（初日12時開始）。まちの歴史紹介パネル（①土族移住から150年 駆け足でたどる「手稲」の歴史・②「手稲開村」のきっかけとなった片倉小十郎家臣団の入植・③手稲最大の産業遺産 金が採れたヤマ「手稲鉱山」・④前田の地名のおこり 酪農の礎を築いた「前田農場」）をはじめ、アルバムにみる昭和の風景「ちょっと昔の手稲」、地形とマチのクロスロード「謎解きさっぽろ」手稲区編 ※札幌市博物館活動センター提供、写真パネル「懐かしの手稲駅周辺」※手稲まちづくりセンター提供 を展示します。どうぞご来場ください。

★「ていねく情報・文化発信コーナー／ていぬの部屋」がまもなくオープン 手稲区役所1階に設けられていた「手稲歴史資料展示コーナー」が移設し、10月下旬より同1階の「ていねく情報・文化発信コーナー／ていぬの部屋」でリニューアルオープンする予定です。手稲郷土史研究会も区と協働し、歴史資料の展示など運営の一端を担います。お気軽にお立ち寄りください。

次回定例会 ⇒ 発表内容「富丘西公園の生き物たち」菅原純子（手稲郷土史研究会 会員）／11月9日（水）18：15～手稲区民センター 2階 第一・第二会議室 ※マスク着用のこと。会員でない方のご参加は申し込みが必要です。



明治30年代撮影 北海道造林合資会社事務所
（北海道大学附属図書館 所蔵）



明治末期『北海道産業写真帖』より
「軽川 造林会社種苗仕立ノ景」
（北海道大学附属図書館 所蔵）